緑の地球クラブ

創刊
リポート
2013 夏

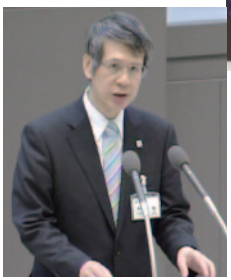
★豊かな緑と共に生きる★
環境の世紀、都市の世紀の首都東京

緑の地球クラブは、山下ようこ都議が2013年3月25日に結成した
都議会の新会派です。東京都の環境、農業、緑化施策を中心に報告します。

東京都技監兼建設局長
村尾公一

東京都知事
猪瀬直樹

東京都議会議員
山下ようこ



東京都環境局長
大野輝之

東京都産業労働局長
中西充

東京都議会議員
山下ようこ

本会議一般質問登壇！

全質疑
収　録

ご一読いただき、ご意見をいただければ幸いです。

♠先進的かつ充実の環境施策

それでは私、山下ようこが一般質問をさせていただく。環境の世紀と呼ばれる21世紀も12年が経過。東京都では、その最初の年、2001年に屋上緑化の義務化が始まり、2010年には、世界初となる都市型キャップ・アンド・トレードがスタートするなど、世界に冠たる環境都市の確立のためのダイナミックな施策が展開されている。

全世界的、地球規模の課題である気候変動対策に着目すると、温室効果ガス排出量について、国は2020年までに、1990年比で25パーセント削減という目標を2009年以来、掲げていたが、このほど、この削減目標を今年11月の国連気候変動枠組条約締約国会議、COP19までに見直すと表明。東日本大震災以来、エネルギー政策が、社会全体で大きくクローズアップされるのに伴い、温室効果ガス削減にかける強い意志が前面に押し出されることが少なくなったと感じる。

こうした中、都は「2020年までに2000年比で25パーセント削減」という目標を今年1月に策定した「2020年の東京へのアクションプログラム」でも堅持し、そのための事業をおこなうとしている。首都・東京が目標を高く掲げ、率先して実効性のある対策に取り組み、成果を上げていくことは極めて大きな意義を持つ。都の気候変動対策のこれまでの成果と今後の取り組みについて伺う。⇨答弁6ページ

温室効果ガス削減のためには、排出量削減への取り組みとともに、植物の光合成による二酸化炭素吸収の働きも強化すべき。東京独自の指標、みどり率は、この数年間の推移を見ると、23区では横ばい、多摩地区では減少傾向。緑を守り、さらに増やす。都が昨年、緑施策の方向性を示す「緑施策の新展開」をまとめたのは適切だ。都の緑施策のこれまでの成果と今後の取り組みを伺う。⇨答弁6ページ

♣大盛況の全国都市緑化フェア

23区でみどり率が横ばい、すなわち都市部の緑地の減少に歯止めがかかっているのは、東京都の緑施策の成果、つまり、都が積極的に緑化を推進しているからこそ、と言える。東京では昨年秋、緑と花の国内最大級の祭典、全国都市緑化フェアが開催された。東京での開催は28年ぶり。私は今から2年前の都議会本会議の一般質問で、この催しが、人間と植物との共存共栄の素晴らしさを多くの人に知らせる大きな可能性を秘めたものであるとの認識を述べた上で、いわゆる一過性のイベントではなく、21世紀を生きる人々に、緑あふれるライフスタイルを提案できるものとするよう要望しつつ、この緑化フェア開催の基本的な考え方を尋ねた。今回のフェアは1か月の開催期間中、入場者が500万人を超え、まさに大盛況と言える緑と花の祭典になった。このフェアを契

〔山下ようこ　プロフィール〕

*山下容子…1958（昭和33）年11月17日、立川生まれ。立川一小、立川一中、都立国立高校を経て千葉大学園芸学部園芸学科卒。大学では花の栽培や色素の研究をはじめ田植え、野菜、果樹等あらゆる農業実習を体験。
*大学卒業後、放送局アナウンサーに。約20年間、ニュース報道に携わる。
*2009年の都議選（青梅市選挙区）で当選。東京都農林・漁業振興対策審議会委員。東京都環境学習リーダー。
*元専門学校東京アナウンス学院講師。
*元武蔵野大学　生涯学習センター「ガーデニング講座」講師。

猪瀬直樹（いのせなおき）東京都知事の答弁（表紙に知事写真）

山下ようこ議員の一般質問にお答えする。

山下議員は園芸が専門なので詳しいが、青いバラはヨーロッパで長年かけて栽培技術を研究してもできなかった。他の色はできたが青はできなかった。それが日本のバイオ技術で青いバラをつくることができた、ということだ。

緑あふれる東京を実現する取り組みについて。東京は江戸時代からずっと世界有数の緑豊かな都市で、大名庭園があり、そして今は六義園（りくぎえん）とかそういう形で残っているが、また、一般庶民も、軒先で緑をはぐくむ文化を引き継いでいて、そういう中で、ジョギングをすると、ついその緑のある並木に沿って走っている自分を発見することがある。

そこで「二〇二〇年の東京」の中で、水と緑の回廊で包まれた美しいまち東京を復活させる、これ意識的にやらないと、確かに緑はどんどん減っていく。だから、意識的に目標をつくって、平成二十八年までにサッカー場一千五百面に相当する緑を創出するとともに、街路樹を百万本に倍増するなど、あらゆる都市空間において緑化を推進していく。

平成十九年に開始した緑の東京募金は、昨年六月に目標額八億円に達した。街路樹に寄付した人の名前をつけ、これは、マイツリーと言うが、その成果で（募金は）今も続いている。校庭の芝生化も、その募金を活用している。今後も東京湾に皇居の広さに匹敵する緑の島を出現させる海の森……皇居はだいたい百ヘクタール、海の森も九十ヘクタールだから、だいたい同じぐらいの大きさの緑の空間がそこに生まれる。ロンドンでのオリンピックのプレゼンも、緑が多い、ということをアピールした。二〇二〇年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催地にふさわしい、豊かな緑あふれる洗練された環境都市東京を実現していきたい。

本会議場で質問に立つ山下ようこ

機として、都民のさらなる緑化意識の高揚を図り、21世紀にふさわしい美しいまち・東京の創造を加速していきたい。そこで、この緑化フェアの成果について、都は主催者として、どのように認識しているのかを伺う。⇨答弁5ページ

♥夢を育む東京都農林総合研究センター（旧東京都農業試験場）

一方、郊外では、農地の減少がみどり率の低下をもたらし、すなわち農業振興が、緑を守り、育てることにつながると言える。小規模経営がほとんどの東京の生産者。その経営を支えていくためには魅力ある新品種の育成、ブランド化が非常に重要なポイントであり、東京都農林総合研究センターの研究者の力に期待するところだ。

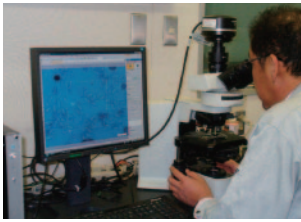
昨年12月の都知事選挙。猪瀬新知事誕生が確実になった際、猪瀬知事は青いバラの花束を抱えて登場し、この花は「不可能を可能にする」という意味を持つ、と語った。研究者の長い年月をかけての努力の結晶、青いバラ。不可能と思われていたのに、ついに開発に成功した青いバラ。私自身、学生時代は花卉（かき）園芸学を専攻し、花の色素をテーマに研究していただけに、この青いバラ育成に取り組む企業の研究には当初から注目しており、今回、猪瀬知事が、このバラを記念すべき瞬間を彩る演出としてセレクトしたことに驚き、感動した。

研究者には、新品種にかける夢がある。そして、この夢の力は、一般の人々の暮らしを豊かにすることもできる。1990年代のガーデニングブームは、茎が垂れ下がるペチュニアの改良種誕生により巻き起こったとも言われる。たった一つの植物の誕生が、人々のライフスタイルに変化をもたらすこともできる。それを実証する事例だ。

2020年東京オリンピック・パラリンピック招致の合い言葉「今、ニッポンには この夢の力が必要だ。」これは、そのまま新品種育成の分野にも当てはまると考える。東京で開発された花、野菜、果物。東京ブランドは人々の暮らしや食卓を豊かにし、同時に東京に住まう喜びや誇りをも生み出す。東京都農林総合研究センターでの新品種育成の取り組みについて伺う。⇨答弁7ページ

※裏表紙に東京ブランドの写真掲載

農業振興のためには、高品質のものを低コストで栽培する技術の確立も重要だ。その研究も農林総合研究センターの役割の柱と言える。栽培技術開発の現状を伺う。⇨答弁7ページ



植物の病原菌を特定する東京都農林総合研究センターの研究員～病害に強い新品種開発等につなげる！

♦オフィスビルの室内緑化の推進を！

さて、私は一貫して、東京のオフィスビルの建物内の緑化、すなわち室内緑化を推進すべきと訴えている。その目的は大きく4つ。1つ目、東京で働くおよそ740万人の職場環境の向上と健康維持。2つ目、ビルから外に強制換気によって排出される空気による大気汚染防止と温室効果ガス・二酸化炭素の削減。3つ目、ヒートアイランド現象緩和。4つ目、観葉植物や苗木、シクラメンなどの鉢花といった室内で育てる植物の需要拡大による農業振興。農業振興は当然、農地・緑地の保全につながり、環境保全の効果が生まれる。

植物には蒸散作用による夏の気温低下と冬の乾燥の緩和。光合成による二酸化炭素吸収、酸素放出の生物学的効果。空気中のホルムアルデヒドやトルエン等、揮発性有機化合物・VOCの吸収、分解による無毒化。これはNASA・アメリカ航空宇宙局の実験などによって立証されている。そして、いわゆる癒しという精神的効果。植物には、これら複合的な力がある。生命を持つ植物だからこそ、同じ生きるものとして、人間との命の絆を育むこともできる。

村尾公一（むらおこういち） 東京都技監の答弁（表紙に都技監写真）

第二十九回全国都市緑化フェアTOKYOについて。上野恩賜公園や井の頭恩賜公園などメイン六会場及び区市の公園などから成るサテライト会場で、民間企業など延べ五百五十団体に上る出展、協賛により五感を通じて楽しむ庭園群など、新たな緑との触れ合いを提案し、緑化意識の高揚につながるフェアを開催。延べ二千八百名に及ぶボランティアスタッフが、会場案内や草花の管理などに参加し、きめ細かな会場運営が行われ、フェア閉幕後もボランティアの一部が引き続き公園内の花壇管理を行うなど、緑化活動を継続する人材の育成も図られた。

これら取り組みの結果、目標入場者数五百万人を超える五百十六万人も来場、フェアを成功裏に終えた。

花の庭～生命の館～（井の頭恩賜公園会場）

オフィスビル内のパソコン、プリンターなどのOA機器からは、人間にとって有害なVOCが発生しており、働く人は、VOCを含む空気の中で勤務している。そして、その空気は換気により外に排出されている。

たとえば、ここ東京都庁。第一庁舎、第二庁舎の事務フロアーの容積を図面によって私自身が計算したところ、およそ50万立米となった。一方、執務室の二酸化炭素濃度は1000PPM以下に保つことが法律で義務付けられているため、この都庁では、1日2回の強制換気、つまり空気の総入れ替えをおこなっている。ということは、都庁職員が呼吸によって吐き出す二酸化炭素やOA機器などから発生するVOCを含んだ空気が、1日100万立米も大気に放出されている計算だ。これと同様のことが各ビルでおこなわれている。この実態を認識し、高層ビルが林立する、この首都東京から室内緑化を推進すべきだ。

私は、この室内緑化について、今から3年余り前の2009年12月の都議会本会議の一般質問で、その必要性を述べた。そのとき私は室内緑化の都の基本的認識について質問し、当時の有留武司（ありとめたけし）・環境局長は「緑は美しく風格のある都市景観の創出に加えて、そこに住む人々の心にゆとりやくつろぎを与えるなど、その役割は多様かつ重要。オフィス空間などの室内緑化についても、都民に潤いや安らぎを与えるとともに、身の回りにある緑を大切に守りたいと思う心を育むなど、さまざまな効果があるものと認識している。」と答弁。一般の事業所では、景気低迷の影響も受け、室内緑化縮小の傾向が見られると言われる昨今だが、この都庁内では、税収が減少する中でも室内緑化は堅実に推移し、このうち病院経営本部では、都立病院内部の緑化面積が拡大、また、昨年の全国都市緑化フェアでは、室内緑化されたビルの写真が出展団体によって掲示されるなど、3年前の質疑以来、室内緑化推進の動きが見られる。このような着実な前進は都庁各局の高い見識の表れであると拝察する。心より敬意を表するとともに、都内の職場環境の改善のために、また観葉植物の産地・八丈島や苗木、鉢花を生産する多摩地区はもちろんのこと、都内の室内緑化の推進に熱い期待を寄せる全国の植物生産者の支援のために、そして、かけがえのない地球のために、この室内緑化を都民にさらに広めていくような施策展開を望む。

緑豊かな東京。屋外も建物内も緑化された品格ある都市、東京は、世界からの観光客、とりわけ東京オリンピック・パラリンピックが実現した際、東京を訪れる世界中の人々へのおもてなしにもなるはずだ。

環境の世紀、そして都市の世紀。ここで、緑あふれる東京を実現する取り組みについて、猪瀬直樹知事の決意を伺い、私の質問の結びとする。⇨答弁2・3ページ

中西充（なかにしみつる） 東京都産業労働局長の答弁（表紙に局長写真）

まず花や野菜などの新品種開発の取り組み。東京都農林総合研究センターでは、東京の気候風土に適し、市場競争力や収益性が高く、地域の新たな特産品になるような品種開発に努めている。これまで果物では、大粒で甘い種なしブドウの高尾や甘くて色鮮やかなカキの東京紅、花では香りあるシクラメン、野菜では病害に強いコマツナやウドなどを開発、農家への普及を進めてきた。現在は温暖な気候でも栽培が容易なトルコギキョウや果肉が黄色で甘みの強いキウイフルーツの東京ゴールドを品種登録出願中。※主な写真は裏表紙

次に栽培技術開発の現状。農林総合研究センターでは、これまでコマツナなど収益性向上のため、防虫ネットや紫外線カットフィルムなど新資材を効果的に組み合わせた病害虫防除技術を開発、既に広く実用化。ナシやブドウでは根や枝の生育制御により果実の糖度や収量に加え、作業効率も高める栽培法確立に向け、現在、実証実験中。花のハウス栽培では、燃料費削減のため夜間の暖房時間を最小限に抑える栽培管理方法の開発などに取り組んでいる。今後も農家のコスト削減につながる生産技術の開発を進め、農業振興に寄与する。

大野輝之（おおのてるゆき） 東京都環境局長の答弁（表紙に局長写真）

まず都の気候変動対策について。都はこれまで最先端の低炭素都市の実現に向けて、大規模事業所への総量削減義務制度、中小規模事業所への地球温暖化対策報告書制度、太陽エネルギー利用機器への創意的な普及策など、さまざまな対策を展開してきた。この結果、たとえば、大規模事業所の昨年度のCO_2排出量は、平均で二三％の大幅減となり、住宅用太陽光発電については、都の補助制度開始前に比べて導入速度が十倍以上になるなど、大きな成果を上げている。今後とも都は「二〇二〇年の東京」で掲げた低炭素都市実現を目指して実効性のあるさまざまな対策を進める。

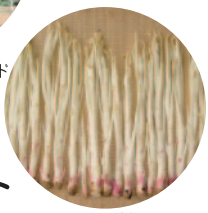
次に緑施策の成果と今後の取り組みについて。都はこれまでも海の森や都市公園の整備、街路樹の倍増、校庭芝生化など、新たな緑の創出に取り組む一方で、自然保護条例に基づく開発許可制度では、緑化計画書制度を通じて開発行為にあわせた緑の確保と創出を図ってきた。今後は、これまでの緑の量を確保する取り組みに加え、生物多様性の保全など緑の質を高める視点も重視して、緑の量と質をともに確保できるよう緑施策を推進する。

緑の地球クラブ　創刊リポート　2013夏　　発行：緑の地球クラブ
〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1　TEL 03-5320-7281　FAX 03-5388-1835

カキ 東京紅（べに）

キウイフルーツ 東京ゴールド

ブドウ 高尾（たかお）


ウド 都香（みやか）

東京都農林総合研究センター
（旧東京都農業試験場）で開発された

東京ブランド　ア・ラ・カルト

香りのあるシクラメン

はる香（か）

おだや香（か）

さわや香（か）

都議会本会議一般質問の翌日、新聞に山下ようこの記事掲載!

青いバラ作戦

「青いバラを抱えて登場した」。山下容子氏は、猪瀬知事が当選祝いで珍しいバラの花束を受け取ったエピソードを交えながら、新品種育成など農業施策についてただした。「きっと理解があるはず」と、青いブレザー姿で服装も抜かりなく臨んだ。猪瀬知事は、アドリブでバラの開発経緯にも触れながら、「豊かな緑があふれる洗練された環境都市・東京を実現する」と前向き答弁。青いバラ作戦は成功といえそうだ。（松）

（東京新聞2月28日朝刊）

掲載内容・目次

都議会本会議・2013年2月27日
山下ようこ一般質問・全質疑収録

♠先進的かつ充実の環境施策 …… 2
Q.気候変動対策のこれまでの成果と今後の取り組みは?
Q.緑施策のこれまでの成果と今後の取り組みは?
♣大盛況の全国都市緑化フェア …… 3
Q.フェアの成果についての都の認識は?
♥夢を育む東京都農林総合研究センター …… 4
Q.新品種育成の取り組みは?
Q.栽培技術開発の現状は?
♦オフィスビルの室内緑化の推進を! …… 5
・室内緑化の目的について
・植物の複合的な力について
★Q.緑あふれる東京を実現する知事の決意を問う …… 7

答弁
・猪瀬直樹　東京都知事 …… 2・3
・村尾公一　東京都技監兼建設局長 …… 5
・大野輝之　東京都環境局長 …… 6
・中西充　東京都産業労働局長 …… 7

※本誌は基本的に質疑全文収録ですが、誌面スペースの関係上、文末等の文体変更や一部要約をしております。
※本会議開催の2月27日時点において、山下ようこは都議会民主党所属議員として一般質問をしております。

※本誌は2013年5月25日時点の編集です。

都政に関するご意見・ご要望をお寄せください。

東京都議会議員
山下ようこ事務所
〒198-0036　東京都青梅市河辺町5-29-26
TEL 0428-25-8383　FAX 0428-25-8388
e mail　staff@yamashita-yoko.com